

26 江戸時代の馬の内臓解剖図と

解剖記述について

松尾 信一

信州大学農学部図書館の「宝永・安西流馬医絵巻」宝永七年（一七二〇）に馬の背面と腹面の解剖図がある。陰陽五行説による観念的模式図であり、馬は胆嚢を欠除する動物であるが、五臓六腑が描いてある。

江戸時代の馬の解剖図の源流は室町時代の「寛正・安西流馬医絵巻」寛正五年（一四六四）や「永正・安西流馬医絵巻」永正八年（一五一二）に遡ることができる。

この他に、橋本道派『仮名安驥集』慶長九年（一六〇四）の解剖図も同型である。また、馬の全身解剖図として「大坪流馬書」写本・寛文六年（一六六六）や長沢茂好「相馬旋毛全集」写本・寛政七年（一七九五）があるが、非常に不正確である。

菊池東水『解馬新書』嘉永五年（一八五二）の解剖図の

出現は、従来のものに比べて不完全ながら実証的になっている。中腔、食道、気管、心、肺及び横隔連属之図、下腔、横隔、胃、肝、脾、厚薄二腸、膀胱及び尿管連属之図や胃、腸一条を為すの図などがある。この『解馬新書』の腸の解剖図の示す盲腸の範囲は、現在の馬体解剖学の定義では盲腸と大結腸に相当し、『解馬新書』の結腸は現在の小結腸に相当する。

ところで、武田科学振興財団杏雨書屋の宇田川榕庵自筆の「馬匹解剖図附馬勃一種」文化十三年（二八一六）の彩色の巻物がある。この巻物は江戸時代の日本在来馬（雄）の写生解剖図で、江戸時代での最も実証的な解剖図である。解剖図は馬体の外形（左側）に、腹部の皮膚、皮筋、肋骨などを切開して、腹腔内臓（結腸）が見える図・胃の図（大網の一部を切開して、実質が示してあり、食道と十二指腸の切断部付）・大腸の図（盲腸と大結腸と一部小腸）・脾臓の図（臓側面）・心臓外形二図（右側と左側）ここまでの図には説明の文字がない。次からの図には、図の題名がある。蹄ヲ断シテ動靜二脈ノ終ル所ヲ見ル（図）と陰莖を横断シテ其質及ビ尿管ヲ見ル（図）には各部位の名

称も記してある。末尾に馬勃一種・鹿ノ玉 大和本草(貝原益軒・宝永五年・一七〇八 卷之九)とある。

次に、江戸時代の馬の解剖記述について、先に記した馬に胆嚢がないことを寺島良安『和漢三才図会』正徳三年(一七二三)や『良薬馬療弁解』宝暦九年(二七五九)は明記している。また、オランダの影響については、

「阿蘭陀馬書」(西説伯樂必携)享保十四年(一七二九)に、
「馬に三個の空所あり、一は頭なり内に脳あり、二は胸なり心臓肺臓あり、三は腹なり内に肝臓、脾臓、腎臓、胃腑、大小腸、膀胱等あり。……心肺の二臓を包み纏ふ薄膜あり之をツベフリートといふ。……又内に横り隔たる薄膜あり之をミツデルマットといふ肝臓は此上にある。血脈運行心臓に起り全体に流れて又心臓に帰す、……」などとある。

「シヨメール厚生新編」馬の部第三・天保六―十一年(一八三五―一四〇)に、
「軀体内外諸部、大腸は三大囊状をなし腹膜下に充塞し、小腸、胃、腸網を掩ふ腸網は甚だ小にして看得し難し。三大囊其一は盲腸にして、二つは結腸なり。盲腸は長さ二尺半、周りは二尺盲腸の端漸夾り

て頸となりて結腸に接す。結腸長さ二丈一尺濶さ甚だ不同裏面に許多の襞積あり、蓋し食物爰に至て結て尿となるなり。小腸は長さ五丈六尺大小腸總計長さ八丈余、凡そ巨獣の類駱駝と雖も腸の長さこと馬に及ばず。蓋し馬は齧獸に非らずして齧獸と一般消化し難き者を用ふ。是故に天是に長腸を賦與して食物伝送の路を冗長にし自ら消化の効を遂げしむるなり。胃も亦齧獸と異にして数個に分れず、唯一にして全く人胃に類す。周り三尺然れども下も十二指腸に接する部は周り僅に五寸許上み食道に接する部は周り四寸許なり。馬は総て嘔吐するの機なし」とある。

上記二書の記述は、現在の馬体解剖学に連なっている。

(横浜市)